

マティアス・テオドール・フォクト (Matthias Theodor Vogt,)

バージョン承認: Lydia Rilling 2023.10.26

<https://www.pizzicato.lu/lydia-rilling-luxemburg-ist-wirklich-ein-besonderer-ort/>

リディア・リリング "ドナウエッシンゲンでは、 一体感の実践を展開する"



リディア・リリング、ドナウエッシンガー・ミュージクタージュ芸術監督。写真: SWR 2023

ドナウエッシンガー・ミュージクターゲ芸術監督、リディア・リリング、対談: マティアス・テオドール・フォクト

100年を経て、あなたはミュージクターゲ初の女性ディレクターとなりました。男女共同参画という点では、どのようなことが達成できましたか?

男女平等という課題は、私と同じように男性同僚にも課せられたものだ。私が女性だからといって、男性とは課題が異なるわけではない。今年、作曲やサウンド・インスタレーションの委嘱を受けたアーティストの70%が女性だったこともあり、女性の存在感が際立っていた。これは、これまでの音楽祭の歴史の中でも前例のないことだ。そして第二に、2つのオーケストラ・コンサートにおける女性の存在感もまた、かつてないほど大きかった。最初のオーケストラ・コンサートでは、女性作曲家の作品だけが演奏された。また、オーケストラをコーディネートしたキャロル

・ロビンソンによって、初めて女性がオーケストラ・コンサートの指揮台に立った。これも革新的だった。

自分でデザインできたプログラム項目はいくつありましたか？ ここ数年のコロナの困難がようやく克服された後、あなたは前任者からどれだけのものを引き継いだのですか？

私が引き継いだ作品は7つある。2021年に私がその職を引き継ぐことが明らかになったとき、前任者のビョルン・ゴットシュタインが2022年か2023年まで延期しなければならぬ作品のリストを送ってきた。ありがたいことに、私はその中から引き継ぎたいものを選ぶことができた。そのおかげで、首尾一貫したプログラムを展開する機会を得ることができた。しかし、さまざまな事情でさらに延期が続き、最終的には7作品になった。ミュージック・デイズが終わった今、すべてが実際にうまくいき、これらの作品はすべて演奏されたと言える。初演まで3年待たなければならなかった作品もある。私にとって重要だったのは、これらの作品やプロジェクトが実際に実現することだった。すでに完成している作品の中には、変更されなかったものもある。一方、ヴォイテク・ブレチャルツは、コンサート・インスタレーション交響曲第3番をさらに発展させた。彼は、3年前と同じアーティストではなく、このプロジェクトにとって、当時よりも今の方がずっといいタイミングだと私に言った。彼の忍耐は報われたのだ。

ドナウエッシンゲンはかつて一国の首都だった。現在は人口2万2千人の小さな町ですが、音楽の日の期間中は、ノイエ・ミュージックの世界首都のように変貌します。ドナウエッシンゲン州の真ん中で、オーケストラのコンサートに1000人以上の聴衆が集まるといえるのは、どうやって可能にしているのですか？

一方では、多くの国から毎年ドナウエッシンゲンに足を運ぶ、非常に忠実なプロの聴衆がいる。ミュージック・デイズは、多くの人々にとってカレンダーの固定日であり、ドイツ語圏のコンテンポラリー音楽シーンの業界会議（それだけではない）でもある。加えて、地元やSWRの放送エリアからの定期的な聴衆がおり、これは音楽祭にとって非常に重要です。また、バーゼル音楽大学との共同企画として、旅費や宿泊費、コンサートチケットの購入が困難な102名の学生を対象とした「ネクスト・ジェネレーション」プログラムも大変喜ばしく思っています。無料のサウンド・インスタレーションは、ドナウエッシンゲン：インネン (Donaueschingerinnen) の間で非常に活発な関心を集めている。また、シュヴァルツヴァルト＝バール地区の住民のために、全コンサートの優待チケットを12ユーロで発売した。これは、ドナウエッシンゲンの人たちがコンサートに来てくれることがいかに重要かを示すためであり、一方で、抑制的な敷居を低くするためでもある。このオファーは好評で、今後も続けていきたい。

あなたはドナウエッシンゲン音楽祭 2023 のテーマとして「コラボレーション」を選びました。

現代の音楽シーンが多様で活気に満ちているのは、他の芸術では古くから当たり前のように行われてきた共同作業が、ますます重要な役割を果たすようになってきたことに負うところが大きい。作曲家と演奏家という古典的な役割分担は、ますます無意味になりつつある。英語では distributed creativity という言葉があるが、これはこれをよく表している。この点で特に興味深いプロジェクトは、エリアーヌ・ラディエグとキャロル・ロビンソンによる『Occam Océan Cinquanta』で、彼らはオーケストラ作品において楽譜を完全に排除した。キャロル・ロビンソンは、最初は少人数のリハーサルで、次にレジスター・リハーサルで、そして後にトゥッティ・リハーサルで、オーケストラの音楽家たちと一緒に作品を作り上げた。私たちは、SWR の依頼で開発プロセス全体に映画チームが同行することになり、来年の初めにこの映画を発表できることをとても嬉しく思っています。

リリングさん、あなたはルクセンブルクのフィルハーモニーからドナウエッシンゲンに移られましたね。ルクセンブルクをどのように振り返っていますか？

ルクセンブルクで過ごした時間はとても楽しかった。ルクセンブルクは本当に特別な国です。フィルハーモニー・ルクセンブルクで働く毎日が幸せだった。自分の職業人生についてそう言える人はあまりいないと思う。私は、ルクセンブルクという国を非常に高く評価するようになりました。特に、異なる背景や言語を持つ人々がどのように共存していくかということに関して、ルクセンブルクのオープンさとプラグマティズム（良い意味での現実主義）を高く評価するようになりました。これは、ルクセンブルク人にとって誇れるものではありません。ルクセンブルクのユニークさに気づいていない人もいるかもしれない。

インタビューをありがとう！